

ゆるされて、立つ

浮田 倫太郎

奨励者紹介〔うきた・りんたろう〕

同志社女子中学校・高等学校社会科教諭

人々はイエスを捕らえ、引いて行き、大祭司の家に連れて入った。ペトロは遠く離れて従った。人々が屋敷の中庭の中央に火をたいて、一緒に座っていたので、ペトロも中に混じって腰を下ろした。するとある女中が、ペトロがたき火に照らされて座っているのを目にして、じっと見つめ、「この人も一緒にいました」と言った。しかし、ペトロはそれを打ち消して、「わたしはあの人を知らない」と言った。少したってから、ほかの人がペトロを見て、「お前もあの連中の仲間だ」と言うと、ペトロは、「いや、そうではない」と言った。一時間ほどたつと、また別の人が、「確かにこの人も一緒だった。ガリラヤの者だから」と言い張った。だが、ペトロは、「あなたの言うことは分からない」と言った。まだこう言い終わらないうちに、突然鶏が鳴いた。主は振り向いてペトロを見つめられた。ペトロは、「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われた主の言葉を思い出した。そして外に出て、激しく泣いた。

（ルカによる福音書 22章54—62節）

隣にある同志社女子中学校・高等学校で、社会科の教員をしております、浮田倫太郎と申します。本日は、水曜チャペル・アワーでこのようにお話しさせていただく機会を、大変光栄に感じます。私は私立学校の一社会科教諭で、今は授業をしながら、宗教部という部署で仕事をし、日々の礼拝のセッティングやクリスマス・ページェントをはじめとするさまざまな宗教行事の運営を担っています。そんな私ですので、この場でどのようなお話ができるのか、とても不安ですが、これまでの自身の信仰の歩みと教師としての歩み、仕事をしていく中での神様との出会いについて、お話をさせていただければ、と思っています。

敬和学園という学校

私は、同志社女子中高で働いて6年、その前は新潟県にある私立学校、敬和学園というキリスト教の高校で、寮の教師と学校の教師を合わせて3年間勤めていました。ですので、教員歴がまもなく10年、気づけばそろそろ「中堅」にさしかかる頃です。10年の歩みの中で、初任から「駆け出し」と言われる5、6年目くらいまで、私の教師生活は、まさに今日のお話のタイトルそのまま、「ゆるされて、立つ」というものでした。このタイトルは少し大げさすぎたか、と思うのですが、何かとんでもないことをしてかしてしまった、などという告白ではありません。ただ、教師として歩んでく中で、日々の生徒との交わりの中で、葛藤し、ぶつかり、失敗をし、傷つけてしまい、そしてそれでもなお、私は今教壇に立たされている、ということです。

教師生活のスタートである敬和学園という高校は、全校で700名ほどのそれほど大きくはない学校で、全校生徒の3分の1が全国から集まる、寮で生活する生徒、残る3分の2が「通生」と呼ばれる新潟市近郊の自宅から通う生徒たちです。敬和学園は、実にさまざまな個性豊かな生徒が集まる学校です。よく、「偏差値

では測れない」学校とも言われます。中学校で不登校を経験し、ほぼ中学3年間学校に通ったことがない生徒、中学で問題行動を起こしてきた生徒、さまざまな精神的課題や悩みを抱えている生徒、はたまた全国各地から集まる、中学の頃はオール5に近い優秀な成績を収めてきた生徒。そんな多様な生徒たちが、不思議なことに一つの学校に集められるのです。学校での生徒の生活は日々波乱万丈、さまざまな出来事が起こります。教員も次から次へと起こる出来事の中で、生徒と向き合い、生徒同様に波乱万丈の日々を送ることとなります。ただ、そのような多忙な日々の中でも、言葉にならない充実感を得、そして数々の「出会い」が与えられていました。

敬和学園での出会い

私は大学生で教員を志し、強い熱意と意欲をもって教師の道を歩み始めました。ところが、次から次に起こる、自分自身が今まで経験したことのない学校現場の現実、日々翻弄されていきました。自分としては、心を砕き、「なんとかしなければいけない」と焦りも伴いながら奮闘していたつもりでした。しかしその奮闘の中で、気づけば物事が悪い方向にばかり進んでいってしまう時もありました。初めて受けもった高校1年生の担任クラスでは、38名の生徒のうち、8名の生徒が退学してしまいました。高校生の、たった1年にも満たない間で、です。8名の顔と名前は、今でも忘れることはありません。当然、何もしなかったわけではなく、たくさん話を聞き、話をし、家庭訪問も頻繁に行いました。何よりも、祈っていました。でも、なぜか、手のひらからこぼれ落ちていくように、するするっと1人、また1人と学校を去っていくのです。そのたびに、とてつもない無力感に襲われました。ただ、担任1年目。今思えば、まだまだできたことはあったし、まだまだ違うアプローチもありました。失敗とは言わなくても、力を尽くしていない、心を生徒に向けきれていないことがあった、そのようにも思えます。

ある時は、クラスでもめ事が起こり、ある女子生徒が非難の対象となっていました。数人の生徒から訴えを受けた私は、話し合いの時間を設けることにしました。当時、さまざまなことが重なり、この1件も早く片付けてしまおう、そう思っていたのだと思います。今考えるとあり得ないことなのですが、放課後、私はその非難されている生徒と、訴えている5人の生徒を一堂に集め、話し合いの場を設けたのです。当然、話し合いになどなるわけはありません。非難されているその生徒は、何を言うことができるでしょうか。これは、明らかな失敗でした。彼女は途中から泣き出し、下校しました。それまで、クラスの生徒とは良い関係を築き、「みんなで話せばなんとかなるだろう」、そう安易な気持ちで考えていたところがありました。ほどなくして、保護者から電話がかかってきました。猛烈な抗議の電話です。当然です。初めてのことに私は戸惑い、ただただ焦っていました。それまで大きな失敗ということ、他者を傷つけるということ、自分の知りうる範囲では大人になってからしていなかった私は、自分のしたこと、大きな衝撃を受けていました。そして、私が原因で心に傷を負った生徒、彼女にどうすればよいのか、そんな焦りがありました。信頼を置く学年主任に相談したところ、主任は言いました。「先生、ここは1人で行ってきな。それが先生のためにもなるよ」。学年主任同伴ではなく、私1人で家庭訪問に行き、謝罪しろ、と言うのです。とてつもなく不安でしたが、とにかく行くしかありません。その夜、学校から車を走らせました。20分ほどの道のりがとてつもなく長く感じたことを覚えています。

何を考えていたでしょうか。今から会う生徒のこと、いや、生徒は私の前に出てきてくれるのだろうか、保護者にどのような言葉を発すればよいのか、彼女には何を伝えようか。

後悔とともにいろいろと考えていました。案の定、彼女はリビングに現れず、私は母親との面談を始めました。とにかく謝りました。大人になってから、これほどにまで他者に対して心から謝ったのは、初めてだったかもしれません。1時間ほどじっくりと母親と話していただいでしょうか。会話を聞いていた生徒が、リビングに入ってきてくれました。その瞬間、大げさですが、私は、ゆるされた思いがしました。彼女はソファに座り、私は、彼女に対して心に思っていることをすべて伝えるつもりで、謝りました。それまでのやりとりも聞き耳を立てて聞いていたようで、彼女は、「いいよ。先生の気持ちは分かったから、大丈夫だよ」と言ってくれたのです。私は涙をためていました。このゆるしに、教師と生徒というよりも、人と人として、心が通じた、そう感じました。教師1年目の6月頃。「教師」になろうとしていた自分に、それ以上に大切な、「人間であれ」、ということを教えられた瞬間でした。

教師として、失敗する時

これまでの教師経験の中で、他にもさまざまな忘れられない出来事がありますが、思い出される出来事は、失敗の場面ばかりです。同志社女子中高に来てからも、何かと失敗を重ねてしまっています。

過ちや失敗をするたびに、どうしてこのようなことになってしまったのか考え、悩みます。過ちや失敗をする時には、はっきりとその原因があります。一つは、仕事の効率を優先しようとする時。自分自身の仕事のやり方を優先して、目の前にいる相手のことを一番に考えず、上手くいく方法、その場を手取り早く形を整え解決できそうなスマートな方法を考える時、過った判断をしてしまいます。

二つめは、プライドです。「自分の保身」と言い換えてもよいかもしれません。これはとても小さなプライドです。よく思われたいと思う気持ち、欲も出るし、自分自身がかわいくて傷つきたくない、そう思ってしまう瞬間があります。もちろん、常にそんなことを考えているわけではありません。しかし、ふとした時に、おそらく切羽詰まっていたり、気のゆるみがあったりする時なのでしょうが、ふっと、「自分の心」に従ってしまっている時があるのです。

聖書では、人間の「罪」について、あらゆる箇所でも説かれています。聖書に沿って考えるならば、私自身はものすごく罪深い人間だと思います。当然、現在の法治国家における法的な概念での罪ではなく、キリスト教における罪。すなわち、「神の御心」に背いてしまうこと、あるいはこの社会、周りの人々に無関心でいてしまうこと、です。教育の現場において、ほんの一瞬でも、目の前にいる相手から目を背けて、あるいは無関心な態度をとってしまったりすると、それは教師として失格だと思います。それがたとえ無意識であったとしても。そのことが原因で、さまざまな過ちや失敗が引き起こされるように思います。

世の中にさまざまな学校がある中で、キリスト教学校あるいはキリスト教主義学校にとって最も大切なこと、それは教職員一人ひとりが、徹底して生徒・学生と向き合うことにあります。そしてそれは、小手先の教員スキルなどを使うのではなく、自分自身の人格のすべてをかけて。だからこそ、その使命を忘れて、テクニク的に、「教師として」要領よくこなそうとする時、あるいは「自分は教師だから正しい」と自信にあふれて突っ走る時、大きな失敗をしてしまうのです。

そんなペトロをも、

神はゆるされた

本日の聖書箇所は、イエスの12人の弟子の一人で、誰よりもイエスのことを愛している、と信じてやまなかったペトロが主人公です。ペトロは、誰よりも愛していると自覚するイエスから、三度の裏切りを予告されてしまいます。まさか、自分にかぎってそんなことがあるわけない。そう強がるペトロが、いざ窮地に立たされた時、彼は不覚にもイエスのことを三度「知らない」と叫び、イエスを否認してしまうのです。そう、不覚にも。常日頃、ペトロがイエスを愛していなかった、そんなことはないでしょう。こうしてやろう、裏切ってやろう、そんなことを思っているわけではないのです。しかし、そんなペトロでさえも、一瞬にして主を裏切るのです。それはまさに、ペトロがイエスの仲間だと指さされ、彼の立場が、彼の身が危うくなった時でした。自分という存在がかわいく、自分という存在を少しでも守ろうと考えてしまう時、人は、自分しか見えなくなってしまう。そして、あらゆるものを裏切ってしまいます。神様をも。

ペトロはその後、自らが犯した罪の大きさに声をあげて泣きます。この時のペトロの心を思うと、私は胸が締め付けられます。きっとペトロは、「善い人」だったのでしょう。まさかこんなことになるとは、思ってもいなかったでしょう。ですが、そこに、人間の弱さがあるのも事実です。

さて、神をも裏切る、罪に対する代償・罰は大きいはずだ、私たちはそう考えます。とりわけ、イエスが死の十字架に向かって、捕まったその瞬間において裏切ったペトロの罪です。ペトロは、どうなるのでしょうか。しかし、聖書に登場するペトロのその後は、人間的な賞罰の概念を一切超えています。本日の聖書箇所の少し前の部分で、そもそもイエスは、ペトロが自分を知らないと言うことを予見し、ペトロにこう言っています。「わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」（ルカによる福音書22章32節）。なんという言葉でしょう。自らは死に向かうイエスが、ペトロの離反を予告しただけでなく、すでにペトロに対してゆるしを約束し、さらには弱いペトロを励ましていたのです。ペトロはその後、復活したイエスと出会って再び使徒として召し出され、キリストの教会を導く指導者、イエスの福音を宣べ伝える者になっていきます。

ここに至るまでの過程で、ペトロはどれほど自分の弱さを悔いたのでしょうか。どれほど自分自身を恨んだのでしょうか。どれほど、神に祈ったのでしょうか。自らが犯した過ちを、ただ開き直るのではなく、心から悔いあらためたペトロだからこそ、神によって新しい生き方へと導かれたのだと思います。

ゆるされて、立つ

イエスの弟子ペトロと、自分自身を同じ次元で扱うことに問題があるかもしれません。しかし、聖書を読むたびに、イエスに背いたペトロ、しかしそのことをもゆるしてくださる神の大きな愛に、私は励まされるのです。むしろ、それは単に自分の失敗を擁護するためでも弁解するためでもありません。むしろ、その逆です。失敗をし、過ちを犯し、もうだめなのかな、そう思う時もあります。自分自身の弱さ、力のなさに、教師という仕事にくじけそうになったことも一度や二度ではありません。けれど、それでもなお、今教壇に立っています。いえ、立つことがゆるされています。できることなら、呼ばれ続ける神様の声を聞き続け、その呼びかけに応え続けて、この与えられた仕事、現場に立ち続けたい、そう願うのです。

神のゆるしに

こたえて…

人は、自分に限ってそんなことはない、そんな過ちはしない、そう思いたくなります。しかし、私たち人間は弱い存在です。自分だけは違うと思っていても、そんなつもりはなくても、世の中に無関心で、周りの人、目の前にいる人に心ない行いをしてしまうこともあります。自分自身のためだけに行動してしまうこともあります。「神の御心」に背いてしまうことがあります。それでも神は、そんな弱い私たちを理解し、ゆるし、再び私たちを呼び寄せ、それぞれに使命を与えられます。その呼びかけに、私たちは気づくことができているでしょうか。私たちは、過ちを犯してしまった後、どう生きていけばよいでしょうか。

つまずきながらも人生を歩む時、私たちの弱さを受け入れてゆるし、励ましてくださる神様の大きな御心をおぼえます。祈り続ける中で、日々御旨にこたえて歩みたい、そう願います。

2019年10月16日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録